MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 9　発行元

第９号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

1年間に500冊読むということ

昨年（２０１８年）の私のミステリの読書冊数は５０９冊。今年も１２月９日現在で４７１冊。なんとか、年間５００冊ペースを維持している。どのように読んでいるかを少しだけ紹介したい。読み方なんて、人それぞれ好きなように読めばよいので、あまり参考にはならないと思うが…。

振り返って今思うこと

そろそろ、この『ミステリ読書案内』を書いている「私」という人物がどんな人なのか、気になっている方も多いのではないだろうか。少しだけ触れておこうと思う。何しろ、これだけの限られた紙面なので、たくさんのことは書けないが…。

ミステリの読書歴は小学校から。現在６０歳代の半ば。高校・中学校の理科の教員を長い間続けてきた。こんな私でも、遠い昔に、ミステリ関係の仕事ができたらと夢を追う時期もあったのだ。

大学４年の時に書いた評論が、その年の『幻影城新人賞評論部門』で最終選考の５篇の中に残った。結局はただの「候補」のままで終わり受賞には至らなかった。ほんとに悔しい思い！！（今でもネットの『文学賞の世界』のホームページを開くと、そのほんの片隅に候補作家として私の名前が載っている。本当にありがたいことだ。）

結果発表後、受賞作家・栗本薫の受賞の言葉の文の中に「１年間に３００冊以上読んでいる」と書いてあって、びっくりした。当時、私は年間８０冊から１００冊程度の読書スピードだったので、年間３００冊なんて夢のまた夢でしかなかった。栗本薫の受賞作とそのコメントを目にして、「こんな天才少女に自分がかなうはずはないな」と率直に思ったことは鮮明に覚えている。（私は栗本薫のひとつ年下です。）

それから多くの時間が過ぎた。栗本薫も亡くなってしまった。今、こうして自分が年間５００冊読める幸せに感謝したい。

計画・記録を取るということ

読むための原動力、エネルギーは、何と言っても「読みたい」という意欲だとは思うが、確実に実行するための工夫としては、「読書計画」と「作品リスト」がある。

今は『読書ノート』に、いつ、どの作家の、どの作品を読むかの計画・見通しをきちんと書くことにしている。同じ作家のものを続けて読むことはせずに、いろんな作家のものを組み合わせるようにしている。実際には、計画通りに行かないことの方が多い。それはいっこうに構わない。自分を読書に向かわせるための手段にすぎないのだから。

読後は、長年続けている、得点の数値をつけて評価し（たいして深い意味はありません。まったくの感覚的なものです。）、パソコン上の「作品リスト」に打ち込んで記録する。こうしておけば、いろんな意味での継続が出来、次の読書へのつながりも可能になってくる。「今日で合計８２１１冊になったぞ」とか…。　読書のことが頭の中の第一の部分を占めているのが、今日このごろである。

今、目標にしていること

今は、各作家の全作品を読破することが目標。西村京太郎は、全著作６００冊超のうち、残すところはあと４冊である。内田康夫は、全著作１４０冊のうち、残りあと１１冊。山村美紗は残り１３冊。津村秀介は残り６冊。年々めざす本が手に入りにくくなり、探すのが難しくなってきている。

まあ、その作家の『ベスト表』を作るからには、全作品を読むことが必要なんだろうと自分で勝手に思い込んでいる。

ネットに作品リスト（書誌）がない島田一男、南英男などは、どうしようもないなぁ……。

海外ミステリ
この1冊・連載5

ロナルド・A・ノックス『陸橋殺人事件』

有名な「ノックスの探偵小説の十戒」の提唱者。『陸橋殺人事件』は１９２５年のイギリスでの出版。いわゆる本格謎解き探偵小説黄金期の中の一作である。「推理小説ファンが最後にゆきつく作品」（内扉の紹介文から）と言われ、古典的名作のひとつとして紹介されている。

鉄道の走る陸橋から落ちたとされる男の死体を発見した四人組。推理するのが大好きな四人なので、警察の捜査そっちのけで、四人四様の推理を展開していくストーリー。謎解きのあれこれを楽しむことができる。私の持っている本は、１９８２年に創元推理文庫から出た完訳版。

「ノックスの十戒」は、いろいろなミステリに引用されているが、フェアプレイに徹した探偵小説の大原則とも言うべきものを十項目にまとめたものである。「犯人は物語の初めから登場していなくてはならない」からスタートし、「不吉な外国人、殊に中国人を登場させてはならない」という有名な一項目も入っている。この本の中では、巻末の戸川氏の「ノート」の部分にまとめられている。